

Manorathapūranī 源泉資料年代論

森 祖 道

1. 問題の所在

パーリ・アッタカター文献¹⁾の源泉資料 (source) の成立年代, 即ちアッタカターの「内容的な成立年代」に関する筆者の一連の研究は, 本稿がその第五篇目に当る。先ず従来 of 四篇の論文を執筆順に列挙すれば次の通りである。

<拙稿 1> 「*Sumaṅgalavilāsini* の源泉資料とその年代」²⁾

<拙稿 2> 「*Visuddhimagga* 源泉資料年代論」³⁾

<拙稿 3> 「*Papañcasūdanī* 源泉資料年代論」⁴⁾

<拙稿 4> 「*Sāratthappakāsini* 源泉資料年代論」⁵⁾

また, <拙稿 5> 「アッタカターに現れたマハーシーヴァ長老」⁶⁾ という一論も, 同じくアッタカター源泉資料年代研究の一環として著わされたものである。

そして, <拙稿 1~4> の諸論文の, 研究の順序には特別の意図があるわけではなく, 多分に恣意的であるが, ただ, 今迄に取扱った四書は, いずれも *Buddhaghosa* (A. D. 5 C. 前半) の著作とされるものばかりである。そこで本稿においては, 引続き同じく *Buddhaghosa* の作とされている *Anguttara-nikāya-Atthakathā* たる *Manorathapūranī* (AA) を取上げることとする⁷⁾。これで四ニカーヤのアッタカターが凡て揃うことになる。

例によって先ず, 本書に現れる源泉資料そのものについて一言すると, 既にアディカランが一応の研究をなして⁸⁾, 挙げている28種の古代シンハラ語等の

古資料の内、次の8種類のもものがAAには見出される。

1. Mahā-Atṭhakathā (AA III—186; V—98<跋文中> cf. Mūla-Atṭhakathā, V—99<跋文中>)
2. Atṭhakathā (単数形) (AA I—33, 49, 113; II—273, 360; IV—149, 188; V—99<跋文中>)
3. Atṭhakathācariyā (AA II—53, 99)
4. Ācariyā (AA I—59<ekacce ācariyā>; II—18 <eke ācariyā>; II—348 <vaḷaṇjanaka-ācariyā>; V—85. cf. V—87 <sabbācariyā>)
5. Viṇḍavādin (AA V—85)
6. Porāṇā (AA I—13, 14, 105; II—46, 287; III—400; IV—190; V—10)
7. Porāṇakattherā (AA II—26; IV—135)
8. Bhāṇakā:
 - Dīgha-Bh. (AA III—128, 347. cf. II—249)
 - Majjhima-Bh. (AA I—306, 309)
 - [Saṃyutta-Bh. (AA V—83)]
 - Āṅguttara-Bh. (AA II—208)
 - Mahā-Jātaka-Bhāṇakathera (AA II—249)

これらの源泉古資料についての詳細な論究は、別の機会に譲ることにするが、とにかく主として以上のような源泉資料に基づいて、Buddhaghosaが制作したとされるこのAAには、総数62人の古代スリランカ人(インド出身でこの国で活躍した人物を含む)の名前が見られる。そして既に<拙稿1~4>においてその都度述べているように、一般に生存・活躍年代の明確でない古代インド人の場合と異なって、彼等スリランカ人の場合は、在位年代の明瞭な国王は勿論のこと、国王以外の人物でも、国王との直接間接の関連を追求することによって、各人のおおよその生存・活躍年代を決定、或いは推定出来る場合が比較的多い。但しその確実度には人によって差異が存在するのはやむを得ないところである。勿論、中にはその事蹟言行等が挿話としてかなり詳細に記述されて

いる人物であっても、彼の年代だけは明らかでないという事例も数多く存するし、また同名人の場合には同一人物か、同名異人なのか、その判定が困難なケースもある。そこで上に挙げた *DA*, *Vsm*, *MA*, *SA* の研究の場合に採った方法と同じく、本稿でも先ず *AA* 中に現れるスリランカ人を凡てピックアップし、彼等を年代の判明せる人物と、不明なる人物とに分けて個々に検討し、最後に登場する人物で年代の判明した者の年代の上限と下限を明確にして、*AA* の源泉資料の年代を決定することとする。

2. 年代の判明せる人物

AA に登場する古代スリランカ人62人の内、種々なる論証によってその生存・活躍年代を決し得る者は次の45人である⁹⁾。しかし彼等の内には、既に<拙稿1~4>において年代の検討がなされ結論が出されている者が多数含まれている。そこで、このような人物については、記述の重複を避けて簡単に結論だけを述べ、彼に関して詳細に吟味した<拙稿>の箇所を参考として示すだけにとどめておく。これは次節の「年代不明の人物」の場合も同様である。以下、パーリ語のアルファベット順に彼等を列挙する。

No. 1 Abhayatthera (*AA* II-54)

B. C. 2 C. 前半頃 (または B. C. 1 C.) の人。<拙稿 3, No. 2>¹⁰⁾ 参照のこと。

No. 2 Asubhakammika-Tissatthera (*AA* I-47)

B. C. 2 C. 中葉より後半の時代、つまり *Duṭṭhagāmaṇi* 王の時代 (B. C. 161-137)¹¹⁾ から *Saddhātissa* 王の時代 (B. C. 137-119) の人。<拙稿 4, No. 3> 参照のこと。

No. 3 Ummattaka-Cittatthera (*AA* I-22)

彼は全アッタカター中、ここに一度だけ登場する。挿話の内容は、女性の容色の、破滅をもたらすような魅力 (*itthirūpassa pariyādānānubhāva*) の実例として、彼が *Mahādāṭhika* (*Mahā*)*nāga* 王の王妃 *Damīladevī* を見て恋情を抱き、狂気の言動を示したので遂に *Ummattaka* (狂える) *Citta* と呼ばれるよう

になったというものである。これによって彼は上記の王 (A. D. 9—21) の時代、つまり A. D. 1 C. 初頭の人物と判明する。

No. 4 Kākavaṇṇa-Tissarāja (AA II—64)

彼は Devānampiyatissa 王の弟、Mahānāga の曾孫に当るが、首都アヌラーダプラに居住して全島に君臨した国王ではなく、マハーガーマに在って南部ローハナ地方だけを統治した地方君主であった¹²⁾。従って彼の名はこの国の王統年代表には現れない。しかし彼は、後にアヌラーダプラをタミール人の Eḷāra 王 (B. C. —161) の手より奪回し中央の君主となった Duṭṭhagāmaṇi 王 (B. C. 161—137) 及び彼の弟でその後を継承した Saddhātissa 王 (B. C. 137—119)、この兄弟王の父君であり、彼が64才で死去したのは Duṭṭhagāmaṇi 王が首都に進撃する以前のことであったから¹³⁾、結局、彼 Kākavaṇṇa-Tissa 王の在位活躍期間は B. C. 2 C. の前半ということになる。

No. 5 Kujjatissatthera (AA II—247)

彼は Maṅgaṇavāsi-Kujjatissa と呼ばれ阿羅漢であった。AA のこの箇所は、Saddhātissa 王と彼との間の挿話を記述しているので、彼がこの王の時代の人であったことは明らかである（彼はこの王の在位中に死去している）。ところで、同じ Maṅgaṇa 住の Khudda(ka)tissa という長老が、Duṭṭhagāmaṇi 王の特別施食を受け、かつまた彼は Kuddāla 等五ヶ所の集会に遅参した長老の一人にも数えられていることが *Mhv* 及び *JA* によって知られる¹⁴⁾。Kujjatissa (せむし、猫背のティッサ) 及び Khudda(ka)tissa (小ティッサ) という名称の類似性、住居の同一なること、更にはいずれも時の国王に篤く尊崇されている点よりして、両者は同一人物と考えてよいであろう。因みにマララセーケーラもアディカランも同様の見解を示している¹⁵⁾。とすると、結局、彼 Kujjatissa (or Khudda(ka)tissa) は、Duṭṭhagāmaṇi 王時代より次の Saddhātissa 王時代、つまり B. C. 2 C. 中葉より後半にかけて活躍した人物と決し得るのである。

No. 6 Kuṭumbiyaputta-Tissatthera (AA I—49)

B. C. 2 C. 中葉 Duṭṭhagāmaṇi 王時代の人。

<拙稿 4, No. 5> 参照のこと。

No. 7 Cūla-Abhayatthera (AA I—26; II—24)

Tipiṭaka-Cūla-Abhayatthera と言われた。B. C. 1 C. 中葉から後半にかけて活躍した人。<拙稿 3, No. 9> 参照のこと。

No. 8 Cūla-Nāgatthera (AA I—26; II—133; V—48)

Tipiṭaka-Cūla-Nāgatthera と言われた。彼は Kūṭakaṇṇa (-tissa) 王の時代 (B. C. 41—19) を含めて、B. C. 1 C. 中葉から後半に活躍した人。<拙稿 3, No. 6> 参照のこと。

No. 9 Cūlapiṇḍapātika-Tissatthera (AA I—36)

彼はローハナの Gāmeṇḍavālavihāra に住し、Milakkhatissa (No. 40) を得度した。後者は多分 Dutthagāmaṇi 王時代の人であるので、彼 Cūlapiṇḍapātika-Tissa も同じく多分この王の時代、つまり B. C. 2 C. 中葉に活躍した人と推定可能である。因みに Dutthagāmaṇi 王の父君で B. C. 2 C. 前半にローハナ地方を統治していた Kākavaṇṇa-Tissa 王 (No. 4) との間の挿話を残している Ambariyavihāra の住人 Piṇḍapātiya-Tissatthera (No. 25) の存在に対して、同じローハナに少し遅れて (B. C. 2 C. 中葉) 活躍したのが本項の Piṇḍapātika-Tissa であるから、前者との比較判別の上から Cūlapiṇḍapātika-Tissa と呼ばれるようになったものと考えられる。

No. 10 Cora-Abhaya (AA III—127)

B. C. 1 C. 前半頃の人。<拙稿 3, No. 1> 参照のこと。

No. 11 Tissa-amacca (AA II—212)

彼は AA では Cūlhupaṭṭhāka-Tissa-amacca と呼ばれており、Dutthagāmaṇi 王の大臣であった。AA のこの箇所並びに *Mhv* (XXIV, v. 20 ff.) によれば、Cullaṅgaṇiya (piṭṭhi) の戦いで王が弟の Saddhātissa に敗北して逃走した時にも、彼は唯一人王に従っていた。また *Vsm* (I—63) に挿話が見られる “Tissa-amacca の母” も既に証明した如く、この Tissa の母である¹⁶⁾。いずれにしても、彼の活躍年代は Dutthagāmaṇi 王の時代、つまり B. C. 2 C. の中葉である。

No. 12 Tissa-amacca (AA II—30 f.)

AAのこの箇所には Cūla-upatṭhāka-Tissa-amacca と記されており、この挿話と同類で一層詳しいものが SA (III—25) にも見られる¹⁷⁾。それは彼と Saddhātissa 王との間の挿話であるから、彼はこの王の時代、つまり B. C. 2 C. 後半に活躍した人物と知られる。因みに Duṭṭhagāmaṇī 王に仕えた前項の Tissa-amacca と本項の同名人物とは、年代的には同一人物であった可能性も考えられる。何故ならば既に述べた如く上記の二王は兄弟であって、B. C. 2 C. の中葉から後半にかけて相次いで在位した国王であったので、この二代の兄弟王に同一人物が続けて仕えたということも一応は考えられるのである。だがしかし実際には *Mhv* (XXIV, XXV, XXXIII) によっても明らかなように、この両王は兄弟でありながら、父王 Kākavaṇṇatissa 王の死後、Cullaṅgaṇiyapiṭṭhi 等において相戦い、最終的に勝利を収めた兄王が南部ローハナより首都アヌラーダプラに進出して全島の国王となったのであるが、一子 Sāli 王子が王位を継承し得なかったのでやむを得ず弟に王位を譲ったというのが実情であったから、このような関係の兄弟王に仕えていた両 Tissa-amacca が同一人物であったとは到底考えられないのである。

No. 13 Tissatthera (AA III—342 f.)

彼は Loṇa (or Lena)-girivāsi-Tissatthera と呼ばれ、AA のこの箇所には彼に関する二つの挿話が記されている。またこの箇所と殆ど同一の文章が DA (II—534 f.), MA (II—397 ff.) にも見られる。ところでこれら二つの挿話の内、第二のそれは、

“Ayam eva pana thero Cetiyaṇṇapabbate Giribhaṇḍamahāpūjāya dānaṭṭhānaṃ gantvā……” という文章で始まっている。そして上記の Cetiya 山における Giribhaṇḍa の大供養とは、Mahādāṭhika-Mahānāga 王 (A. D. 9—21) が行なった大行事であり、その時の様子は *Mhv* (XXXIV, v. 68 ff.) 及び DA† (II—172) 等に述べられている。従って彼 Tissatthera は A. D. 1 C. の初頭頃に活躍した人物であることが判明する。

No. 14 Tissadattatthera (AA II—54)

B. C. 3 C. 末より 2 C. 前半頃の人。〈拙稿 3, No. 12. cf. 拙稿 3, No. 2〉参照のこと。

No. 15 Tissabhūtithera (AA I—39)

AAのこの箇所の文章の冒頭は、

“Aparo pi tasmim yeva mahāvihāre Tissabhūtithero nāma…….”

で始まっているが、この挿話はその前頁の Maliyadevatthera のそれに続くものである。そして後者の冒頭の文章は、

“So kirāyasmā tivassabhikkhukāle Kallagāmato Maṇḍalārāmaka-mahāvihāre……”となっているので、前者の文の“tasmim yeva mahāvihāre”とは Maṇḍalārāmakamahāvihāra であることがわかる。従ってこの Tissa-bhūti とは Maṇḍalārāmakamahāvihāravāsi-Tissabhūti のことと判明するが、彼に関する挿話は *VibhA* (p. 448), *DhsA* (p. 30), *MA* (I—55) 等に見られる。*MA*のそれはAAのこの挿話を簡単にした同一内容のものであり¹⁸⁾、また *VibhA* の挿話によれば、彼は Pitumahārāja の時代の人であった。この Pitumahārāja (=Pitirāja) とは、言う迄もなく、 Vaṭṭagāmaṇī 王 (B. C. 103—102 & 89—77) のことであるから¹⁹⁾、結局、彼 Tissabhūti はこの王の時代、つまり B. C. 2 C. 末より 1 C. 初頭にかけて活躍した人物と決し得る。

No. 16 Damiḷadevi-mahesī (AA I—22)

女性の容色の、破滅をもたらすような魅力の持ち主として彼女の例がここに記されている (No. 3 参照)。そして彼女が Mahādāṭhika (Mahā) nāga 王 (A. D. 9—21) の王妃であったことも明記されているので、彼女は A. D. 1 C. 初頭の人と決し得る。

No. 17 Dārubhaṇḍaka-Mahātissatthera (AA II—60~65)

彼の名が現れるのは全アッタカター中、この箇所だけであるが、この挿話は 6 頁にも渉る長文のものである。その内容は貧しい材木売りであった彼 Mahātissa の犠牲的財施物語であり、特に彼の供養を受けた長老として Ambariya-vihāravāsi-Piṇḍapātiya-Tissa (No. 25) 及び最後に彼を賞讃した Kāka-vaṇṇatissa 王 (No. 4) が登場する。このことから彼はこの王の時代、即ち

B. C. 2 C. 前半の人物と判定し得るのである。

No. 18 Dīghajantu-Damīla (AA II—230 f.)

AAのこの箇所と同一の文章が MA (IV—234) にも見出される。Mhv (XXV, vv. 54, 58 ff., 76) によれば、彼はタミール人の Elāra 王 (B. C. —161) の第一の勇士であって、アヌラーダプラに進攻して来た Duṭṭhagāmaṇi 王の軍隊と勇敢に戦って主君と同じくそこで戦死した。従って彼の死は B. C. 161 年のことであり、その活躍年代は B. C. 2 C. 前半ということになる。

No. 19 Dīghabhāṇaka-Mahā-Abhayatthera (AA II—249)

B. C. 2 C. 末から 1 C. 前半頃の人。〈拙稿 2, No. 8〉参照のこと。

No. 20 Duṭṭhagāmaṇi-Abhayarāja (AA II—212, 379)

彼の在位期間は B. C. 161—137, 従って彼は B. C. 2 C. 中葉に活躍した人物ということになる。

No. 21 Dhammadinnatthera (AA I—42 f.)

Talaṅgaravāsi-Dhammadinna と呼ばれている。彼は Duṭṭhagāmaṇi 王の時代、つまり B. C. 2 C. 中葉に活躍した。〈拙稿 2, No. 9〉参照のこと。

No. 22 Nāga-cora (AA III—127)

Cora-Nāga 王のこと。彼の在位期間は B. C. 62—50. 即ち彼は B. C. 1 C. の中葉に活躍した人。〈拙稿 3, No. 17〉参照のこと。

No. 23 Nāgatthera (AA III—344)

B. C. 100年前後に活躍した人物。Nāgattheriyā (次項) の弟。〈拙稿 3, No. 18〉参照のこと。

No. 24 Nāgattheriyā (AA III—343 f.)

Bhātaragāmaṇi-Nāgattheriyā. Nāgatthera (前項) の姉。彼女の活躍年代は同じく B. C. 100年前後の頃。〈拙稿 3, No. 19〉参照のこと。

No. 25 Piṇḍapātiya-Tissatthera (AA II—60~65)

彼は Ambariyavihāra の住人であった。彼に関する AA の挿話は大変長文であるが、その中に B. C. 2 C. 前半に在位したローハナ地方の王 Kākavaṇṇatissa (B. C. 161 以前) が登場する (AA II—64)。従って彼 Piṇḍapātiya-

Tissa の活躍年代もこの王の時代、つまり B. C. 2 C. 前半ということになる。

No. 26 Pitumahārāja (AA I—137, 304)

または Pitirāja とも呼ぶ。Mhv (XXXIV, vv. 34~36) によれば、彼が Vaṭṭagāmaṇi 王のことであることは明らかである。また VibhA (p. 448) には、

Brāhmaṇatissacore mate Pitumahārājā chattaṃ ussāpesi (盗賊ブラーフマナティッサが死んだ時、ピトゥ大王は〔王位の象徴たる〕天蓋を挙げた——つまり王位に就いた) という一文が存するので、このことから彼がこの盗賊の横行した時代の前後に在位した王、即ち Vaṭṭagāmaṇi 王 (B. C. 103—102: 第一回の在位, 89—77: 第二回の在位) に他ならないことが立証される。

No. 27 Pitamallatthera (AA I—49)

B. C. 2 C. 中葉の Duṭṭhagāmaṇi 王時代の人。〈拙稿 4, No. 11〉参照のこと。

No. 28 Bodhimātu-Mahātissatthera (AA II—213)

B. C. 2 C. 中葉の Duṭṭhagāmaṇi 王時代の人。〈拙稿 4, No. 5〉参照のこと。

No. 29 Bhātiya-mahārāja (AA V—5)

彼は Kūṭakaṇṇatissa 王の子で、Mahādāṭhika 王の兄弟であったので、Bhātiya (or Bhātika 兄弟)-Abhaya 王と呼ばれた。彼の在位は B. C. 19—A. D. 9, つまり彼は西暦紀元元年前後に活躍した人である。

No. 30 Maliyadevatthera (AA I—38)

B. C. 2 C. 中葉の Duṭṭhagāmaṇi 王時代の人。〈拙稿 3, No. 24〉参照のこと。

No. 31 Mahātissatthera (AA I—42 f.)

彼は元来 Talaṅgaravāsi-Dhammadinnatthera (No. 21) の業処の師 (kammaṭṭhāna-ācariya) であったが、60才になって弟子の助力で初めて阿羅漢となったとされている人物である。弟子の Dhammadinna は B. C. 2 C. 中葉の Duṭṭhagāmaṇi 王時代の人と知られているから、師たる Mahātissa も同じく B. C. 2 C. 中葉頃の人と判定してよいであろう。

No. 32 Mahādāthika-Mahānāgarāja (AA I—22)

彼に関する記述はAAのこの箇所他に、*Mhv*(XXXIV, v. 68 ff.; XXXV, v. 1), *Dpv* (XXI, v. 34) 等に見られるが、要するに彼の在位は A. D. 9—21. 即ち彼は A. D. 1 C. 初頭に活躍した人物である。

No. 33 Mahānāgatthera (AA I—50)

彼は Uccavālikavāsi-Mahānāga と呼ばれた。 *Vsm* (II—634) 及び *VibhA* (p. 489) によれば²⁰⁾、彼は Talaṅgaravāsi-Dhammadinnatthera (No. 21) の師 (ācariya) であって、観随染 (vipassanūpakkilesa) を起した者であったが²¹⁾、後に弟子の Dhammadinna の努力により、自己の凡夫たることを知って改めて修行し遂に阿羅漢位に達した人である。彼に関するこの説話は No. 31 の Mahātissatthera の場合と基本的に類似しているが、しかし挿話の具体的内容は明らかに全く別のものであるし、名前もはっきりと相違している。従ってこの両者はかつては何らかの意味で Dhammadinna の師であった別人と考えるよいであろう。恐らく修行時代の若き Dhammadinna は何人もの長老を色々な場合に師と仰いで努力し、遂には偉大なる阿羅漢となり、その後にはかつての恩師を一人一人このようにして導き助力して廻ったのであろう。いずれにしても Dhammadinna は Dutthagāmaṇī 王時代の人であるから、彼 Mahānāga も同じく同王の時代、つまり B. C. 2 C. 中葉に活躍した人と考えるよい。 <拙稿 2, No. 15> 参照のこと。

No. 34 Mahānāgatthera (AA IV—155)

AAのこの箇所には、

“..... Mahānāgattherassa bhāgineyyo Saṅharakkhitasāmaṇero viya paṭhaviṃ kampeti” とだけあって、具体的挿話はないが、彼が Saṅharakkhitasāmaṇera の伯父であったことはわかる。ところが *DA* (II—558) には上記の文章と同一の文に続いて具体的な挿話が記述され、そこには “Sāmuddika-Mahānāgatthera” と記されている。一方 *MT* (II—605) には Dutthagāmaṇī 王の一子 Sāli 王子がその前生において特別の施食をした有徳の長老の一人に彼が数えられている (但し “Sāmuddavihāravāsi-Mahānāga” となっている)。

このことから、彼の活躍年代は *Duṭṭhagāmaṇi* 王の治世、つまり B. C. 2 C. 中葉と決し得る。〈拙稿 1, No. 3〉参照のこと。

No. 35 Mahānāgatthera (AA II-246)

彼は *Kālavallimaṇḍapavāsi-Mahānāga* と呼ばれた。B. C. 2 C. 中葉の *Duṭṭhagāmaṇi* 王時代の人。〈拙稿 4, No. 14〉参照のこと。

No. 36 Mahāmittatthera (AA II-59)

Kassakaleṇa の住人であった。*DA* (III-709), *MA* (I-294), *SA* (III-159), *VibhA* (p. 279) にも AA のこの箇所と同文の挿話が存する。但し時に彼のことを *Ayyamitta* とも呼んでいる。彼は多分 *Kākavaṇṇatissa* 王の活躍した B. C. 2 C. 前半の人と推定される。〈拙稿 4, No. 2〉参照のこと。

No. 37 Mahāvyagghatthera (AA II-247)

AA のこの箇所において、彼は *Saddhātissa* 王と共に登場して来る。一方 *Mhv* (XXXII, v. 48 ff., esp. v. 54) によれば、彼は *Duṭṭhagāmaṇi* 王が飢饉に際して特別施食をした五人の大長老の一人に挙げられているので、結局、彼 *Mahāvyaggha* は、*Duṭṭhagāmaṇi* 王時代から次の *Saddhātissa* 王時代、即ち B. C. 2 C. の中葉から後半にかけて活躍した人と知られる。〈拙稿 2, No. 4〉参照のこと。

No. 38 Mahā-Saṅgharakkhitatthera (AA I-40)

Tissabhūtithera (No. 15) の挿話に出て来る彼は *Malayavāsi-Mahā-Saṅgharakkhita* と呼ばれている。彼は *Vaṭṭagāmaṇi* 王時代の人、つまり B. C. 2 C. 末より 1 C. 初頭に活躍した人物である²²⁾。

No. 39 Mahāsivatthera (AA I-40, 49)

彼は *Gāmantapabbhāravāsi-Mahāsiva* と呼ばれた。“*Gāmanta-*” は文献によって “*Vāmanta-*” ともなっている。彼の活躍年代は B. C. 2 C. 中葉の *Duṭṭhagāmaṇi* 王の時代であった。〈拙稿 2, No. 18 & 拙稿 3, No. 23〉参照のこと。

No. 40 Mahāsivatthera (AA III-51; IV-28, 149)

彼は前項の同名人とは別人であり、アッタカターの各所に *Dīghabhānaka-*

Tipiṭaka-Mahāsīva, Dīghabhāṇaka-Ms., Tipiṭaka-Ms., たゞの Mahāsīva 等の名で合計四十回も登場する著名な Tipiṭakatthera である。彼に関する詳しい検討は<拙稿 5>に譲るが、要するに彼の活躍年代は、*MT* (II-555) に出て来る彼と Vasabha 王 (A. D. 65-109) との間の挿話によって、この王と同じ A. D. 1 C. 後半から 2 C. 初頭にかけての時代と決し得るのである。

No. 41 Milakkha-Tissatthera (AA I-35, 49)

彼は多分 B. C. 2 C. 中葉の Duṭṭhagāmaṇī 王時代の人と推定される。<拙稿 4, No. 16>参照のこと。

No. 42 Saṃyuttābhāṇaka-Cūlasivatthera (AA V-83)

Brāhmaṇatīya による危難 (bhaya) の時代、即ち B. C. 100 年前後頃に活躍した人。<拙稿 2, No. 5>参照のこと。

No. 43 Saṅgharakkhita-sāmaṇera (AA IV-155)

彼は Mahānāgatthera (No. 34) の甥であった。No. 15 で述べた如く、Mahānāga は Duṭṭhagāmaṇī 王の時代 (B. C. 2 C. 中葉) の人であったから、その甥たる彼 Saṅgharakkhita はそれより多少年少であって、B. C. 2 C. の中葉から後半にかけて活躍したと考えられる。

No. 44 Saddhātissa-mahārāja (AA I-23; II-30, 246 ff.)

本稿においてもしばしば言及されている国王。彼の在位年代は B. C. 2 C. 後半の 137-119 である。

No. 45 Summatthera (AA II-133; V-48)

Dīpavihāravāsi-Summatthera と呼ばれた。彼に関する AA の二カ所の文章は相互に殆ど一致する。彼の活躍年代は B. C. 1 C. 中頃と考えられる。<拙稿 3, Nos. 7 & 8>参照のこと。

3. 年代不明の人物

No. 46 Uttara-janapadamanussa (AA II-347)

彼はローハナ地方の Bherapāsānavihāra に住していた。彼に関する挿話は全アッタカター中、ここに現れるだけであり、これによっては彼の活躍年代は

知り得ない。

No. 47 Gaṇakaputta-Tissatthera (AA II—341)

全アッタカター中、彼の名はこの箇所と *MNidA* (II—38) とに一度ずつ現れる。両者の文章は原則的に一致する。ここで “tisahassī mahāsahassī” (三千大千) という語の注釈に彼の所説が引用されている。また AA の脚註の一写本には “Bhāṇaka-Gaṇakaputta-Tissa” とあるので、彼は或る種の註釈家であったと考えられるが、活躍年代等これ以外の詳細は不明である。

No. 48 Catunikāyika-Tissatthera (AA II—173)

彼は Kolutavihāra の住人で、Potaliyavihāra の住人 Dattābhayatthera (No. 51) の弟であった。また VA (III—695) によって、彼は Mahātipīkatthera の弟子であったことも知られるが、いずれにしても彼の年代は不明である。

No. 49 Cūlapīṇḍapātika-Tissatthera (AA II—215)

彼は Girivihāravāsi-Cūlapīṇḍapātika-Tissa と呼ばれていた。彼については AA のこの箇所にしか挿話が見られないが、その内容は彼と Madu-aṅgaṇāgāma の或るタミール人の門番 (Damiḷadovārika) との間の挿話である。しかしこれによって彼の年代は知り得ない。

No. 50 Tissatthera (AA I—44)

彼は Cittalapabbata の住人であった。(Mahā)-Tissa という同名人は実に多いが、彼は全アッタカター中、ここにだけ登場する。挿話は彼が如何にして阿羅漢になったかを記しているが、彼の活躍年代は不明である。ローハナ地方の Cittalapabbata に初めて viāra を創建したのは、B. C. 2 C. 前半の Kāka-vaṇṇatissa 王であるから²³⁾、彼の年代はこの時代か、それ以降ということになるが、正確なことはわからない。

No. 51 Tissatthera (AA II—311)

彼は Tepīṭaka-Tissa と呼ばれ、全アッタカター中、ここだけに登場する。彼の年代は知り得ない。

No. 52 Dattābhayatthera (AA II—173)

既に No. 48 で触れた如く、彼は Potaliyavihāra の住人であって、Kolita-vihāravāsi-Catunikāyika-Tissatthera の兄であった。しかし彼の活躍年代は不明である。

No. 53 Dighasummatthera (AA III-109)

AA のこの文章と同一のものが MA (V-76) にも見られる。その内容は Kalyāṇi (今日の Kelaniya) 河の河口 (mukhādvāra)²⁴⁾ に住む一漁師とこの長老との間の挿話があるが、これによっては彼の年代は知り得ない²⁵⁾。

No. 54 Phussamittatthera (AA I-53, 59)

彼は Kurundakavāsi²⁶⁾-Phussamitta と呼ばれた。AA の上記の二ヵ所にもその名前が見出されるが、二ヵ所共に彼の所説が引用されている点から考えて、彼は註釈家であったと想像されるが、しかし年代等は不明である。

No. 55 Mahāgatimba-Abhayatthera (AA III-244)

彼に関しては AA のこの箇所他に、DA (II-530) にも挿話が見られるが、年代は不明である。

No. 56 Mahādevatthera (AA III-227)

彼は Karaṇḍakolavāsi-Mahādeva と呼ばれ、AA のこの箇所にだけ登場するが、年代は知り得ない。Karaṇḍakola という場所も現在の何処に当るのか不明である²⁷⁾。

No. 57 Mahāvācakāla-upāsaka (AA II-216)

全アッタカター中、彼はここに一度だけ登場する。挿話の内容は、悪業物語としての彼の修行因縁話である。その文章の冒頭は、

“Antaragaṅgāya pana Mahāvācakāla-upāsako nāma ahoṣi”.

とあるが、“antaragaṅgā” (ガンガーの内側) とは、当時の首都アヌラーダプラを中心として位置づけした表現であって、このガンガーとはインド本土のガンジス河のことではなく、スリランカの中央部を流れる、この国第一の大河 Mahāvāluka-gaṅgā (今日の Māhēveli-gaṅgā) のことである。因みにこれを “Gaṅgāya parato Rohaṇa-janapade” (ガンガーの彼方のローハナ地方に) という表現²⁸⁾と対照すると一層明確になる。従って彼がスリランカの人であったこと

は明らかであるが、彼の年代等は知り得ない。

No. 58 Visākhaththera (AA V—83)

年代不明。〈拙稿 2, No. 40〉参照のこと。

No. 59 Sāketa-Tissatthera (AA I—77; IV—119)

AA (I—77) の挿話は MA (II—140) のそれと同文であり、また AA (IV—119) の彼に関する短い言及は DA (III—1061) のそれと同一である。前者の挿話の舞台は、Kaṇikāravālikasamuddamahāvihāra であり、アディカランはこれをスリランカの詳細不明の一精舎とし、彼をスリランカ人と考えているが²⁹⁾、その論拠は示されていない。彼の冠称である Sāketa とは、言う迄もなくコーサラ国の都市の名(沙計多)であるから、この点よりすれば彼はインド人であり挿話の舞台もインドではなかったかと考えられる。しかしまた一方では、彼はインド人でありながらスリランカで比丘となって、「Sāketa 出身の Tissa」と呼ばれていた人とも考えられなくはない。いずれにしても、彼の年代は不明である。

No. 60 Sudinnatthera (AA III—159)

AAのこの箇所においては、“sutta”という名称のつかない文献でも仏説であるか否かという問題に対する彼の見解が引用されているが、これと殆ど同一の文章が DA (II—566) にも見出される。しかし彼の年代は不明である。

No. 61 Soṇatthera (AA II—17, 56)

彼は Soṇagiriの麓 (pāda) の Pañcalamahāvihāra に住した dhammakathika であると述べられている。AA (II—17) と殆ど同一の文章が MA (IV—125) 及び VibhA (p. 439) に見出される。但し彼が住していた vihāra の名は多少ずつ相違していて、

AA: Pañcalamahāvihāra

MA: Pacelivihāra

VibhA: Pippalivihāra

となっている。また Soṇagiri の所在もわからない。挿話の内容は、獵師であった彼の父親を殺生の業より彼が救済するというものであるが、彼の年代は不

明である。

No. 62 Sosānikamahākumāratthera (AA, I—77)

MA (II—140) にも AA のこの箇所と同一の文章が見られる。そこには彼の居所も示されておらず、彼がスリランカの長老であったのか否かも確かではないが、アディカランは彼をスリランカの人と考えている³⁰⁾。しかし彼の年代は不明である。

4. 結 論

第2・3節で検討した如く、AAに現れる総数62人に上る古代スリランカ人(乃至はこの国で活躍した人物)の中で、生存・活躍年代が一応判明した者は第2節の45人であった。そこで上記の45人を年代順に分類すると次のようになる。

(A) B. C. 3 C. 末——2 C. 前半頃 [Devānampiyatissa 王 (B. C. 250—210) の晩年頃より Uttiya 王の時代を経て Mahāsīva 王時代 (Geiger 説: B. C. 197—187)³¹⁾まで]

(1) Tissadattatthera (No. 14)

(B) B. C. 2 C. 前半 [Eḷāra 王 (B. C. —161) や ローハナ地方君主 Kākavaṇṇatissa 王の時代]

(2) Abhayatthera (No. 1) (異説としては B. C. 1 C.)

(3) Kākavaṇṇatissarāja 自身 (No. 4)

(4) Dārubhaṇḍaka-Mahātissatthera (No. 17)

(5) Dīghajantu-Damiḷa (No. 18)

(6) Piṇḍapātiya-Tissatthera (No. 25)

(7) Mahāmittatthera (No. 36)

(C) B. C. 2 C. 中葉 [Dutthagāmaṇī 王時代 (B. C. 161—137)]

(8) Kuṭumbiyaputta-Tissatthera (No. 6)

(9) Cūḷapiṇḍapātika-Tissatthera (No. 9)

(10) Tissa-amacca (No. 11)

(11) Dutthagāmaṇī-rāja 自身 (No. 20)

- (12) Dhammadinnatthera (No. 21)
- (13) Pītamallatthera (No. 27)
- (14) Bodhimātu-Mahātissatthera (No. 28)
- (15) Maliyadevatthera (No. 30)
- (16) Mahātissatthera (No. 31)
- (17) Mahānāgatthera (No. 33)
- (18) Mahānāgatthera (No. 34)
- (19) Mahānāgatthera (No. 35)
- (20) Mahāsīvatthera (No. 39)
- (21) Milakkha-Tissatthera (No. 40)
- (D) B. C. 2 C. 中葉——後半 [Duṭṭhagāmaṇi 王時代 (B. C. 161—137)
より Saddhātissa 王時代 (137—119)]
- (22) Asubhakammika-Tissatthera (No. 2)
- (23) Kujjatissatthera (No. 5)
- (24) Mahāvyaagghatthera (No. 37)
- (25) Saṅgharakkhita-sāmaṇera (No. 42)
- (E) B. C. 2 C. 後半 [Saddhātissa 王時代 (B. C. 137—119)]
- (26) Tissa-amacca (No. 12)
- (27) Saddhātissamahārāja 自身 (No. 43)
- (F) B. C. 2 C. 末—1 C. 前半頃 [Vaṭṭagāmaṇi 王時代 (B. C. 103—102
& 89—77) 及び Brāhmaṇa-Tiya の危難の時代, 即ち5人のタミール
人王の時代 (B. C. 102—89) 等]
- (28) Cora-Abhaya (No. 10)
- (29) Tissabhūtittthera (No. 15)
- (30) Dīghabhāṇaka-Mahā-Abhayatthera (No. 19)
- (31) Nāgatthera (No. 23)
- (32) Nāgattheriyā (No. 24)
- (33) Pitu-mahārāja (=Vaṭṭagāmaṇi 王自身) (No. 26)

- (34) Mahāsaṅgharakkhitatthera (No. 38)
 (35) Saṃyuttabhāṇaka-Cūlasivatthera (No. 41)
 (G) B. C. 1 C. 中葉 [Cora-nāga 王時代 (B. C. 62—50) を含む]
 (36) Nāga-cora (=Cora-nāga 王自身) (No. 22)
 (37) Summatthera (No. 44)
 (H) B. C. 1 C. 中葉——後半 [Kūṭakaṇṇa-Tissa 王時代 (B. C. 41—19) を含む]
 (38) Cūla-Abhayatthera (No. 7)
 (39) Cūla-Nāgatthera (No. 8)
 (I) A. D. 1 年前後 [Bhātika-Abhaya 王時代 (B. C. 19—A. D. 9)]
 (40) Bhātiya-mahārāja (=Bhātika-Abhaya 王自身) (No. 29)
 (J) A. D. 1 C. 初頭 [Mahādāṭhika-Mahānāga 王時代 (A. D. 9—22)]
 (41) Ummattakacittatthera (No. 3)
 (42) Tissatthera (No. 13)
 (43) Damiḷadevi-mahesī (No. 16)
 (44) Mahādāṭhika-Mahānāgarāja 自身 (No. 32)
 (K) A. D. 1 C. 後半——2 C. 初頭 [Vasabha 王時代 (A. D. 65—109)]
 (45) Mahāsivatthera (No. 40)

以上、45人の年代を全体的に考慮すると、

(A) 1人	(D) 4人	(G) 2人	(J) 4人
(B) 6人	(E) 2人	(H) 2人	(K) 1人
(C) 14人	(F) 8人	(I) 1人	

となる。またその年代の上限はB. C. 3 C. 末に当る Devānampiyatissa 王の晩年頃であり、その下限はA. D. 1 C. 後半から2 C. 初頭にかけての Vasabha 王の時代である。そこでこの年代を、既に明らかとなった *DA*, *Vsm*, *MA*, *SA* の各結論と比較してみると、

DA: Duṭṭhagāmaṇī 王——Vasabha 王

Vsm: Devānampiyatissa 王の晩年——Vasabha 王

MA: Devānampiyatissa 王の晩年——Vasabha 王

SA: Devānampiyatissa 王の晩年——Bhātika 王

AA: Devānampiyatissa 王の晩年——Vasabha 王

となる。しかるに既に<拙稿4>の「結論」においても触れた如く、Devānampiyatissa 王の晩年頃迄遡る人物は、Vsm, MA, SA に共通して Tissadattathera 唯一人であった。ところがこのAAにおいても、この時代(A)迄遡る人物は、全く同一の Tissadatta 一人だけである。但しAA以外の四書ではこの Tissadatta 一人を例外として除外すれば、あとは凡て Duṭṭhagāmaṇī 王時代(B. C. 2 C. 中葉)以降の人物のみとなったが、このAAにおいては、Duṭṭhagāmaṇī 王の父君等の時代つまり B. C. 2 C. 前半頃(B)の人物が6人登場する。しかし、登場人物が急増するのは、やはり次の Duṭṭhagāmaṇī 王の時代(C)であって、この時代に属する人数14人という数字は、(A)–(K)の11の時代区分の人数の中で最も多い。更に、次の(D)の時代とは、既述の如く、Duṭṭhagāmaṇī 王からその次の Saddhātissa 王時代にまたがる年代を意味するから、もしこの時代をも(C)に含めて計算するとすれば、その人数は4名追加されて合計22人、即ち全体の半数にも達する。さてその次に登場人物が集中している時代は(F) Vaṭṭagāmaṇī 王時代でその人数は8人であって、ここにいわば第二の山がある。

続いて登場人物の年代の下限について吟味すると、AAのそれは(K) Vasabha 王時代(A. D. 1 C. 後半——2 C. 初頭)である。この下限はDA, Vsm, MAの三書と共通であるが、Bhātika 王時代(A. D. 1年前後)を下限とするSAよりは約100年遅くなっている。以上の五書だけに限って比較すれば、明らかに、SAを除く四書に共通する Vasabha 王時代を原則的な下限年代と考え、SAの場合はむしろ例外的と看做すことが出来る。

しかし、これも既に<拙稿1~4>の「結論」においてその都度述べているように、アッタカターの源泉資料の年代論は、アッタカター全体を通して総合的に検討し結論すべき問題であって、各書の個々の「結論」はそれに達する過程或いは最終結論を導き出す為の一要素であって、どこまでも中間報告的なも

のである。従って今回もここで最終的な結論を述べることは、勿論差し控えておくこととする。しかしながら、*DA* 等四書の場合と同じく、この *AA* においても、その源泉資料の年代（内容的成立年代）の下限が、A. D. 5 C. 前半の著者 *Buddhaghosa* の時代よりはかなり遡っている点は注目に価する文献的事実である。

略 号

- AA* = *Aṅguttara-Aṭṭhakathā*, *Manorathapūraṇi*
DA = *Dīghanikāya-Aṭṭhakathā*, *Sumaṅgalavilāsini*
DAT = *Dīghanikāya-Ṭīkā*, *Linatthavaṇṇanā*
DhsA = *Dhammasaṅgaṇi-Aṭṭhakathā*, *Atthasālini*
DPPN = *Dictionary of Pāli Proper Names*
Dpv = *Divavaṃsa*
JA = *Jātaka-Aṭṭhakathā*
MA = *Majjhimanikāya-Aṭṭhakathā*, *Papañcasūdanī*
Mhv = *Mahāvaṃsa*
MNidA = *Mahā-Niddesa-Aṭṭhakathā*, *Saddhammapajjotikā*
MT = *Mahāvaṃsa-Ṭīkā*, *Vaṃsatthappakāsini*
PTS = *Pāli Text Society*
SA = *Saṃyuttanikāya-Aṭṭhakathā*, *Sāratthappakāsini*
SHB = *Simon Hewavitarne Bequest Series*
VA = *Vinaya-Aṭṭhakathā*, *Samantapāsādikā*
VibhA = *Vibhaṅga-Aṭṭhakathā*, *Sammohavinodanī*
Vsm = *Visuddhimagga*

註（使用せるパーリ原典は、特記のない限り、凡てPTS版である）

- 1) アッタカター文献の種類や範疇については広狭様々な定義や分類が可能であるが、今ここでは、「三蔵の直接の註釈書に *Vsm* を加えたもの」とする。詳しくは、拙稿「アッタカター文献の種類範疇」（『印度学仏教学研究』第25巻第1号、昭和51年12月、83～88頁）参照のこと。
- 2) 『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第8号、昭和51年9月、(3)～(15)頁。
- 3) 『城西大学教養関係紀要』第1巻第1号、昭和52年3月、35～50頁。

- 4) 『仏教学』第4号, 昭和52年10月, 1~24頁。
- 5) 『仏教研究』第7号, 昭和53年2月。
- 6) 『印度学仏教学研究』第26巻第1号, 昭和52年12月。
- 7) 標準となる PTS 版の AA は全5巻:
 Max Walleser, ed.: vol. I (1973, First published 1924); Max Walleser & Hermann Kopp, ed.: vol. II (1967, First published 1930); Hermann Kopp, ed.: vol. III (1966, First published 1936), vol. IV (1963, First published 1940), vol. V (1956). なおその他の刊本として,
 1. スリランカ SHB 版 全2巻:
 Dh. S. Dhammānanda, ed.: part I (Series No. XV, 1923), part II (No. XXXIII, 1931).
 2. ビルマ第六結集版全3巻:
 vol. I (Series No. 17, 1957); vol. II (No. 18, 1958); vol. III (No. 19, 1958).
 3. タイ王室版全3巻: Series Nos. 18, 19, 20, 1919 (B. E. 2463)
 などが存する。
- 8) E. W. Adikaram: *Early History of Buddhism in Ceylon*, Colombo, 1953 (First Impression 1946) pp. 10 ff. なお拙稿「Visuddhimagga 著述事情考」(『仏教研究』第2号, 浜松, 1972年, 108~105頁) 参照のこと。
- 9) 但し, 序文に出て来る Mahā-Mahinda (AA 1-1) 及び跋文中の bhadanta-Jotipāla (AA V-98), Jivaka (AA V-98) 等は源泉資料の年代決定の手掛りとはなり得ないので, これらは除外する。また, 特定の人物を指示してはいるもののその人物の名が固有名記として明示されていない者, 例えば eka Damiḷa-dovārika (門番, AA II-215), Pāṭaliputtaka-brāhmaṇa (AA II-246), eka Piṇḍapātiyatthera (AA II-248), Sudhāmuṇḍakavāsi-dahara (AA I-26) 等の名も除外する。
- 10) <拙稿 3, No. 2>においては, B. C. 3C. 末より 2C. 前半頃に活躍した Tissa-dattatthera と大体同時代の少し年少者として Abhayatthera の年代を「B. C. 2C. 中葉から後半頃」と述べたが, これでは同時代人とは言えないので, 本文の如く「B. C. 2C. 前半頃」と改める。
- 11) スリランカ国王の在位年代は, その最新の説である C. W. Nicholas & S. Paranavitana, ed.: *University of Ceylon, A Concise History of Ceylon*, Colombo, 1961 所収の年代表 “A Chronological List of Ceylon Kings” に依る。なお, これに関しては, 拙稿「スリランカ王統年代論再考——W. ガイガー説修正の研究史

—「『仏教研究』第6号 pp. (58)—(81) 参照のこと。

- 12) *Mhv* XXII, v. 1 ff.
- 13) *ibid.*, XXIV, v. 12 ff.; XXV, v. 1 ff.
- 14) <拙稿 2, Nos. 4 & 18>.
- 15) G. P. Malalasekera: *DPPN* I—617, Kujjatissa Thera の項; I—721, Khuddaka Tissa の項, Adikaram: *op. cit.* p. 67 因みに他の版の該当箇所を当ると, *SHB* 版 (vol. XV, AA I—384, l. 36) には Maṅgaṇavāsi-Kujjatissatthera とあるが, ビルマ版 (AA II—133, l. 7) には Maṅgalavāsi-Kuṭṭatissatthera とある。Maṅgala という表記は *PTS* 版の脚註(1)にも示されている。長い伝承の間に, この程度の差異が生ずるのは避けられないことであろう。
- 16) <拙稿 2, No. 6> 参照。
- 17) <拙稿 4, No. 8> 参照。
- 18) <拙稿 3, No. 20> 参照。
- 19) *Mhv* XXXIII, v. 36. cf. 本稿 No. 26。
- 20) これら両書の相当箇所は同一文である。
- 21) 「観随染」とは「定によって鎮伏せられたる諸煩惱が生起しないので, <我は阿羅漢なり> という心を起す」とことと説明されている (samāpattivikkhambhitānaṃ kilesānaṃ asamudācārato araha: ahan ti cittaṃ uppādeti.)
- 22) Tissabhūti の項 (No. 15) 並びに <拙稿 3, No. 22> 参照のこと。
- 23) *Mhv* XXII, v. 23.
- 24) Mukhadvāra > Muvadora > Modara (ジンハラ語) > Mutwal となって, ここは今日のケラニヤ河河口の Mutwal のことである (Adikaram: *op. cit.* p. 113. cf. *Dpv* II, v. 42 ff.
- 25) ここに一つの可能性がある。VA (I—104) には Mahinda 長老の弟子たる Mahā-Ariṭṭha 長老の弟子として, 三名の長老の名が具体的に挙げられているが, その中に Dighasumana という名が見出される。彼は同じ VA (I—62) 等に記されている「阿闍梨相承」(ācariya-paramparā) の中の同名人と同一人物であろう。そしてこの Dighasumana がもし問題の Dighasumma と同一人物であるとするならば, 彼は Ariṭṭha の弟子達が活躍した B. C. 3 C. 末より 2 C. の前半頃の人ということになる^④。因みに Duṭṭhagāmaṇi 王 (B. C. 161—137) が, B. C. 161年にタミール人の Eḷāra 王を倒して首都アヌラーダプラを奪回する迄の, B. C. 2 C. 前半のかなりの期間は^⑤, アヌラーダプラはこのタミール人王に占拠されていたので, この期間に首都の比丘長老達は難を逃れて島の各地に散って行ったであろう。

更に又、Adikaram は◎、ケラニヤ地方に最古のヴィハーラが創建されたのは「B. C. 2 C. の中頃」のことであると述べているが、Geiger の年代説に拠っている彼の言う「B. C. 2 C. 中頃」とは、我々の新説では「B. C. 2 C. 前半頃」に相当するので、結局、この「B. C. 2 C. 前半頃」にこの地方には既に僧伽が存在していたことになる。とすれば Ariṭṭha の弟子たる Dighasumma (Dighasumana) が B. C. 2 C. 前半頃に首都を遠く下ったケラニヤ地方に活躍したという可能性は十分認めることが出来るのである。

Ⓐ例えば<拙稿 3, No. 12>参照。

ⒷMhv (XXI, vv. 13~14) は Elāra 王の在位期間を44年間としているので、Geiger はこれに従って彼の在位を「B. C. 145—104」としているが、最新説(註11)では彼の在位期間を含めて、Devānampiyatissa 王(B. C. 250—210)の次の Uttiya 王よりこの Elāra 王迄の歴代国王の在位期間は個々には空白となっている。

◎Adikaram: *op. cit.* p. 113.

- 26) この場所については、Adikaram: *op. cit.* p. 122 (17) 参照。cf. W. Geiger: Cūlavamsa English Translation, vol. I, p. 66, note 6.
- 27) Adikaram: *op. cit.* p. 122 (13).
- 28) *Vsm* I—96. cf. <拙稿 2, No. 27>.
- 29) Adikaram: *op. cit.* Appendices pp. vi & xi. cf. p. 121 (12).
- 30) Adikaram: *op. cit.* Appendices p. iii (Mahākumāra の項).
- 31) Mahāsiva 王の在位年代は註(11)の年代表には示されていない。よって便宜的に Geiger 説を示した。